

SAPPORO MINAMIKU
ART SEASON
2023-2025
ARCHIVE

南區アートシーズン 2023-2025 活動前録集

まちを育てるひと、
ひとを育てるまち。

 ミナミナク・アートプロジェクト



区長挨拶・発刊によせて

南区は豊かな緑や清流に恵まれ、石山緑地や札幌芸術の森など芸術文化に関わる数々の施設があり、この地を愛する多くのアーティストが区内に住居やアトリエを構えて創作活動を行っています。

当区では、「アート」を地域資源と捉えて、アートを通じた心豊かで魅力あるまちづくりに取り組んでいます。その中核をなすのが「ミナミナク・アートプロジェクト」です（ミナミナクは、「南区（ミナミク）」と「ミナミナ（アイヌ語で「笑顔」）からなる造語）。このアートプロジェクトは南区の美しい季節の移ろいと共に展開され、たくさんの笑顔の輪を広げてきました。

この活動を長年にわたり牽引してくださったのが、初代実行委員長であり、北海道を代表する彫刻家の國松明日香氏です。國松氏は、切り立った岩肌が露出した採石場跡を生かした、芸術的な景観の石山緑地を彫刻家集団 CINQ（サンク）のメンバーとしてデザインされています。令和7年（2025年）3月、あまりに惜しまれるご逝去の報に接しましたが、氏が南区とアートプロジェクトに注いでくださった深い愛情と情熱は、私たちの心の中に、今も静かに、力強く息づいています。

本冊子は、令和5年（2023年）から令和7年（2025年）までの3年間にわたる南区アートシーズンの活動を網羅し、その軌跡をまとめたものです。これが皆様にとって南区やアートの魅力を再発見する契機となれば幸いです。

私たちは、この記録集を新たな出発点として、これからも区民、アーティスト、実行委員会委員の皆様と手を携え、アートによる心豊かで魅力あるまちづくりを進めてまいります。

南区長 大谷 聡美

INDEX

区長挨拶・発刊によせて	01
ミナミナク・アートプロジェクトの概要	03
ミナミナク・アートプロジェクトの歩み	04
実行委員長挨拶	05
— 追悼 — 初代実行委員長 國松 明日香氏へ	06
イベント記録【2023-2025】	07~28
2023	
【夏】ヴァイオリンの声と詩の演奏会	07
【秋】フォークロアの音と形	09
【冬】森を継ぐ／燐光を紡ぐ	11
2024	
【夏】ヴァイオリン、チェロ、オーボエ、 ピアノによるバッハの独白	13
【秋】まち・リビング	15
【冬】キオクノカタチ	19
2025	
【春】はるのあしあと	23
【夏】いのちのひびき ×いしやまキャンドルナイト2025	27
南区アートシーズン3年間 【2023-2025】の広報物	29
Artist Index【アーティストインテックス】	31
サポーター活動風景	37
サポーター活動記録	39
サポーター制度紹介・募集要項	40
特集・資料	41
Special Thanks	44
ミナミナク・アートプロジェクト 実行委員会 名簿	45

ミナミナク・アートプロジェクトの概要

芸術の息吹が日常に溶け込むまちへ ～ミナミナク・アートプロジェクトの軌跡と展望～

南区のポテンシャル

雄大な自然と、札幌芸術の森やデザイン系学部を持つ大学などの文化の拠点、そして、区内に拠点を構える数多のアーティスト。南区は、市内でも稀な「アートのみち」としての土壌を持っている。

豊かな地域資源に恵まれる南区。その中でも「アート」をまちづくりの核に据え、地域に笑顔と活気をもたらしたいという思い。それが南区のアート関連事業の出発点である。

「ミナミナク・アートプロジェクト」への進化

南区では、かねてより、学生と連携したアート作品展の実施など、アートを活かした取り組みを行ってきた。

令和3年（2021年）、これまでの実績を礎として、本プロジェクトの母体となる「南区=アートのみち」プロジェクト実行委員会が発足した。同委員会は、委員長（当時）を務めた彫刻家の國松明日香氏をはじめ、区内の大学、PMF組織委員会、札幌芸術の森美術館など、多岐にわたる専門家の知見と協力を結集したものである。

令和4年（2022年）には、各実行委員の推薦に基づき、南区ゆかりのアーティストの情報を集めた「南区アーティストファイル2022」を作成した（令和5年には第2弾となる「2023版」を作成）。掲載されたアーティストたちは、南区のアート事業を支える重要な存在となっている。

大きな転機となったのが、区制50周年を記念した、令和4年（2022年）9月の「南区芸術祭 2022 ～ミンナミニイク・ミナミナク～」である。ディレクター、アーティスト、協賛企業、そして多くのボランティアが一丸となって創り上げ、約1か月にわたり開催されたこの祭典では、美術作品展示、コンサート、ワークショップなどが区内各所で展開された。連携事業も含めると1万人以上の市民が来場し、南区におけるアートの持つ力を内外に強く印象付ける機会となった。

令和5年（2023年）には、この成功と熱量を継承し、さらに地域に根ざした取り組みへと進化させるべく、名称を「ミナミナク・アートプロジェクト」へと刷新。「南区（ミナミク）」にアイヌ語の「ミナミナ（笑顔）」を重ねたこの名には、「南区が笑顔になれる場所」であり続けたいという願いが込められている。

四季を彩る「南区アートシーズン」

令和5年（2023年）からは、日常の中にアートを定着させるため、「南区アートシーズン」を展開した。

過ぎゆく春の名残りを味わう「はるのあしあと」、夏のキャンドルナイトと共鳴する「いのちのひびき」、そして冬の記憶を辿る「キオクノカタチ」など、季節の移ろいととも、南区ゆかりのアーティストの表現を身近に楽しめる場を創出してきた。

他にも、関連団体や町内会・学校等と連携し、地域住民に身近な地区コンサートを開催するなど、地域に根差した活動を積み重ねている。

こうした活動の大きな推進力となっているのが、令和2年（2020年）度からプロジェクトを支えている「ミナミナク・アートプロジェクトサポーター」の存在だ。サポーターは、イベントの運営や広報活動のみならず、企画提案など主体的にプロジェクトを牽引している。

市民の熱意と地域住民との連携が相まって、これらのイベントは単なる鑑賞の機会を超え、地域への愛着を育む場として定着し始めている。

未来への展望

私たちが目指すのは、イベントの集客数増だけではない。

ふと立ち寄った場所で音楽や作品に出会い、笑顔が生まれる——。そんな「アートによる心豊かで魅力あるまち」の実現を目指し、これからも、雄大な自然の美しさと、人の創造力を力に変えて歩み続けていきたい。

ミナミナク・アートプロジェクトの歩み



日常に息づく芸術の火を、絶やすことなく —南区アートシーズンの3年間とこれから

いま札幌市南区を拠点として、さまざまなジャンルの数多くのアーティストが活動しています。また、南区出身で国内外を舞台に活躍する人も少なくありません。さらに区内には、札幌芸術の森、石山緑地、最近人気の「頭大仏」などのアートスポットが点在し、酪農の歴史やオリンピックの記憶を刻む彫刻がいくつも設置されています。札幌市立大学や東海大学札幌キャンパスなどのデザインや文化の学びの場もあります。その面積の大部分を森林が占める南区は、豊かな自然と隣接して、他にはあまりないほど独特なアートが身近に感じられる地区だと言えるのではないのでしょうか。

「ミナミナク・アートプロジェクト」は、この地に息づくこうしたアートの力を、まちづくりに結びつけていこうとする取り組みです。令和5年（2023年）からは主に、この冊子にまとめた「南区アートシーズン」を展開してきました。

この活動の中心となり牽引してきたのは、初代実行委員長の故・國松明日香氏に他なりません。本プロジェクトの発端となった、区政50周年記念事業「南区芸術祭」令和4年（2022年）を、私は観客の立場で拝見しましたが、南区の持つポテンシャルとともに、地域が限定され、住民との関係が近いからこそ深まるものの可能性を強く感じました。それを一過性で終わらせることのないよう、翌年から始められたのが、この「南区アートシーズン」です。そこには、せっかく芽生えたアートの新たな動きを絶やさず、大掛かりでなくとも、年間を通じて楽しめる場として継続していくべきだという、國松氏の強い思いがあったと聞いています。「南区アートシーズン」という名称も國松氏の考案です。そして、単にイベントを続けるだけでなく、アートが市民の日常に溶け込む将来像も、思い描いていたのだそうです。

その重いバトンを、このたび私が受け取ることに

なりましたが、躊躇しながらも大役をお引き受けしたのは、國松氏が生前に「次の委員長は吉崎さんしかない」とおっしゃっていたと事務局の方からお聞きしたからです。初耳でしたが、そうであるならば、断るわけにはいきません。私も南区の住民であり、札幌芸術の森に開園時から約30年にわたり勤務したこともあって、南区には愛着を持っています。微力ながらも、美術館の学芸員として地域の美術と深く関わってきた経験を活かし、さまざまな専門の分野を持つ他の実行委員と協力しながら、國松氏の遺志を引き継ぎ、彼が敷いた道を途絶えさせることなく、つなげていきたいと思っています。

「南区アートシーズン」の特徴のひとつに、異なるジャンルの融合があります。詩×音楽、陶芸×民族音楽、映像×写真×舞台—。これらは、多様なアーティストが活動している南区だからこそ実現できた試みと言えるでしょう。また、運営は、学生や公募ボランティア「ミナミナク・アートプロジェクトサポーター」の皆様を支えられています。こうした方々とアーティスト、そして来場者との立場を超えた交流こそが、このプロジェクトが目指す「心豊かで魅力あるまち」へとつながっていくものと信じています。

本誌は、「南区アートシーズン」の3年間の活動の記録であると同時に、南区が持っているアートの力とその可能性の証でもあります。私たちの願いは、「南区＝アートのまち」がスローガンで終わるのではなく、当たり前前の日常として定着することです。日々の暮らしのふとした瞬間に、心動かされる表現に出会えることこそが、生活をより豊かなものにしていくはずで

す。國松氏が灯した火は、いま確かに地域の中に広がりはじめています。この記録集が、これまでの歩みを確かめる道標となるとともに、南区のアートの未来を紡ぐ新たな一歩となることを願っています。

ミナミナク・アートプロジェクトの初代実行委員長を務められた國松 明日香氏が、令和7年（2025年）3月に逝去されました。ありし日をしのび、ここに謹んで哀悼の意を表します。



トークセッション「南区ダイアログ vol.1」にて司会を務める國松氏（中央）

國松 明日香 撮影：川尻 亮一

想像の種を蒔いた、笑顔と情熱の人。—— 彫刻家・國松明日香氏が遺したアートの景色

北海道を代表する彫刻家でありながら、素顔は驚くほど気さくで、誰に対しても穏やかな笑顔で接してくれた國松明日香氏。氏は生前、「私の彫刻は、劣等感から始まった」と語っていた。完成形を決めて作る手法から、やがて「作りながら考える」手法へと変化していった。「完成形を決めつけず、素材と対話しながら方向性を探る。そうすると、不思議と自分の想像を超えた素晴らしい作品が生まれるんだ」。

この哲学は、プロジェクト運営にも貫かれていた。最初から細部を決め込むことはせず、まず大まかなイメージと熱意を提示し、仲間と共に走りながら作り上げていく。「私一人の発想はたかが知れている。みんな

の意見を取り込めば、もっと素晴らしいものができる」。その言葉通り、プロジェクトは人々の化学反応によって、予想を超えた豊かな形へと成長していった。

手品で場を和ませる茶目っ気や、アートへの真摯な情熱。その人間力は多くの人を惹きつけ、協力を仰げば誰もが「國松さんが言うなら」と快諾した。氏が蒔いた想像の種は、想いを受け継ぐ私たちの心にしっかりと根を張り、この南区を愛するみんなの手で、大切に育てられている。氏の情熱は、今もプロジェクトを動かす原動力だ。私たちはその想いを胸に、アートの力によるまちづくりを通して、未来への歩みを進めていくことを誓う。

プロフィール 國松 明日香（くしまつ あすか） 彫刻家 / ミナミナク・アートプロジェクト 初代実行委員長

- 略歴 1947年、北海道小樽市生まれ。東京藝術大学大学院修了。1991年より札幌市立高等専門学校（現：札幌市立大学）教授を務め、南区のデザイン教育に貢献。1993年には彫刻家集団「CINQ」の一員として、南区石山緑地の設計・制作を手がける。札幌芸術の森野外美術館「日暮れ時の街No.9」、大和ハウスプレミストドーム（札幌ドーム）「休息する翼」、札幌駅前通「NIKE」、大倉山ジャンプ競技場「詩碑とNIKE」など、パブリックアート設置多数。
- 主な受賞歴 第1回C.C.A.C.ワールドプリントコンペティション最優秀賞（1973 / サンフランシスコ）、第4回本郷新賞（1989）、紺綬褒章受章（2009）、札幌芸術賞（2016）、北海道文化賞（2023）、地域文化功労者文部科学大臣表彰（2024）など。
- 2025年3月、77歳で逝去。



THE MILKY WAY #2（札幌芸術の森美術館蔵）撮影：前澤 良彰

北海道を代表する彫刻家。札幌駅前通や札幌ドームをはじめ、札幌市内の公共施設や街角に数多くの作品が設置されており、その風景は広く市民に親しまれている。



捷（厚別公園競技場）

「虹と雪のパレード」詩碑とNIKE（大倉山ジャンプ競技場）